

## 山岸文庫蔵『左京大夫集』影印・解題

小島孝之

### 解題

山岸文庫には『左京大夫集』の古写本一冊が蔵されている。

まず書誌の概略を記す。

○外箱 桐材、小口に旧蔵者のものと覚しい貼紙があり、「乙四六九／左京／太夫集／真性／法親王／真翰」とある。  
「乙」の下に「大六」朱円形印を押す。

○内箱 桐材、かぶせ蓋、黒漆塗り。中央に金泥で、「左京大夫集 空性法親王真翰」と打ちつけ書き。  
鶴・蝶・花などを織り出した白絹の布に包まれた一帖を収める。

○左京大夫集一帖

写本、縦二一・四糎、横一四・一糎。列帖装。料紙は唐草紋様などを雲母刷した厚手の斐紙。料紙五枚を重ねて二つ

折りにした一〇丁を一括りとして、三括り三〇丁。表紙は深草色、金欄で二重枠内に竜・麒麟紋様のある亀甲地紋の豪華な装丁。見返しは金箔。綴糸は切れている。本文は最初の一丁遊紙で、墨付二九丁。一首二行、一面一〇行書き。題簽はなく、外題、内題ともになし。

さて、内箱には「空性法親王真翰」とあるが、空性は『本朝皇胤紹運録』によれば、陽光院の第二皇子で後陽成院の同母弟である。「二品。大覚寺。還俗号<sub>ニ</sub>随庵<sub>ニ</sub>」ともあり、『諸門跡譜』「大覚寺」の項によれば、「陽光院御子。母后新上東門院。勸修寺内大臣晴秀公女。還俗号<sub>ニ</sub>瑞庵<sub>ニ</sub>。慶安三<sub>庚寅</sub>八廿五薨。七十八歳。」とある。この空性の真筆であるならば、安土桃山から江戸初期の写ということになるが、この内箱の筆者名が何に基づくかは明らかでない。「随庵」筆という伝承をもつ色紙などは古筆手鑑類の中に散見されるが、確実なものは多くない。伏見宮家旧蔵『短冊手鑑』に、「空性」の署名のある短冊があり、これらと比較したところでは似ている点もあるが、別筆と見るべき点もあり、料紙、書風とあわせて見ると、鎌倉中期、下つても鎌倉末期の書写とすべきであらうと考えられ、箱と装丁とは後補であらうと思う。

「左京大夫」すなわち藤原顕輔の歌集は、現在二一本が知られており、『私家集大成 中古Ⅱ』の解題（井上宗雄氏執筆）が簡にして要を尽くしている。同解題によれば、『左京大夫集』の諸本はすべて同一系統に属し、奥書から三類に分類されるという。第一類は寛元四年の真観の奥書を有する本で、現存一一本がこれに相当するとされる。第二類はこの第一類本の真観奥書に続けて、本文中に少々不審がある旨を追記した本で、第一類本からの写本に発するものである。これには現存の六本が相当するとされる。第三類はその他を一括したものであるが、このうち群書類従本は、「右左京大夫顕輔卿集以両本校合了」の奥書を有し、三首の欠脱と四三首の後補をもつ特異な本であるが、後補部分を有する点で第二類の中の文化十年板本との近さを想定させる本である。また、御所本は、「以大宮三位本<sub>乞</sub>書留」という奥書を有し、第一、

二類本と同じ知家本からの伝写本と考えられるものである。以上に対して、伊達文庫本と野上文雄氏所蔵本とは奥書がない。野上本は内容的には御所本と二、三の少異しかない全くの同類本であるとされている。

この頭輔の歌集の伝本の系統分類は、福崎春雄氏に詳細な研究がある。<sup>(注1)</sup>これによれば第三類に含まれている伝本のうち、伊達本は独自誤写が多いということで系統図のどこに位置づけるべきか迷い、その配置を保留されている。群書類従

本も校合本ゆえ位置づけが困難であるとされるが、第一類本と第二類本の混態本という位置に置かれている。これらに対して、御所本と野上本は他の諸本とは異なる点が多く、かつ二本間では共通するというのはっきりした特徴があり、第一・第二類本とは別系統の知家本の流れを引く本とみなされている。

ところで、野上本は中川芳雄氏による翻刻<sup>(注2)</sup>があり、翻刻本文に表紙を含めて十面分の写真が添えられている。これまでに、中川氏をはじめ、福崎氏も井上氏もこの本の書写年代については奥書もないことから慎重に言及を避けてきているようであるが、写真版による判断では心もとないけれども、その料紙の装飾、筆力などからみて、鎌倉時代中期を下らない古写本であると考えられる。もしそうだとすれば、この野上本の類の本文は、もっと重視されてよいのではないかと考える。

山岸本の本文は野上本とほとんど同文で、全くの同系統本である。左にその要点を記す。

1、本文は漢字・仮名の区別はもとより、異体字の使い分けまで一致している。特に仮名の「ハ」「ミ」「ニ」などの使用箇所はほぼ完璧に一致している。「歌」と「哥」の使い分けもほぼ一致している。

2、ミセケチによる修正や傍記まで完璧に一致している。

3、集付が歌頭にあるが、これは第一・第二類本と野上本の間には大きな相違があり、山岸本は野上本と一致する。唯一の相違箇所は25番歌に、山岸本のみ「金」とあり、野上本にはない。この歌、金葉集二度本82番に入集しているの

で、野上本の書き落しであろう。

4、2 番歌・9 番歌で野上本「郭公」とあるのを、山岸本は「ほとゝきす」と仮名書きする。これは両書の間の唯一の表記の違いであり、何故ここだけが違うのかは不明である。

5、27 番歌、野上本「よかれかちなる」が山岸本「よかれうちなる」。これは「か」の仮名「可」の書き誤りか読み違いであろう。

6、59 番歌詞書の、野上本「前左衛佐」が山岸本「前左衛門佐」。これは野上本の書き落しである。

7、84 番歌、野上本「さしもやゝまし」のオドリ字「ゝ」が山岸本は「い」または「ハ」と読める文字になっているが、これは山岸本の誤写と思われる。

8、86 番歌、野上本「こゝのへニ」が山岸本「ミのへニ」。山岸本が「こゝ」を一字のように書いてしまった誤りである。

9、91 番歌詞書、野上本「和哥題十五日」は山岸本「和哥題十五首」。野上本の誤写であろう。

10、106 番歌詞書、野上本「稻春」は山岸本「稻春哥」。野上本の書き落しと見られる。

11、116 番歌詞書、野上本「長岑山小松」の「山小」の二字を山岸本は一字のようにくっつけて書いており、山岸本の誤写である。

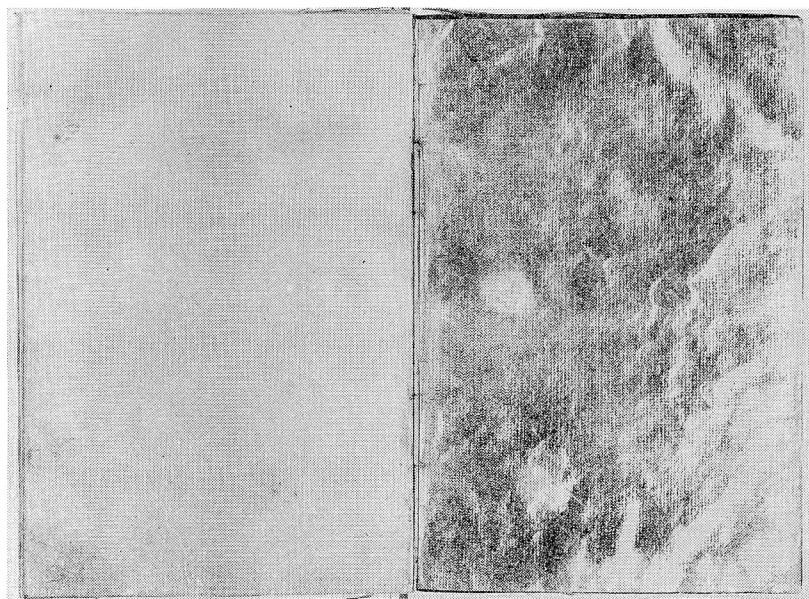
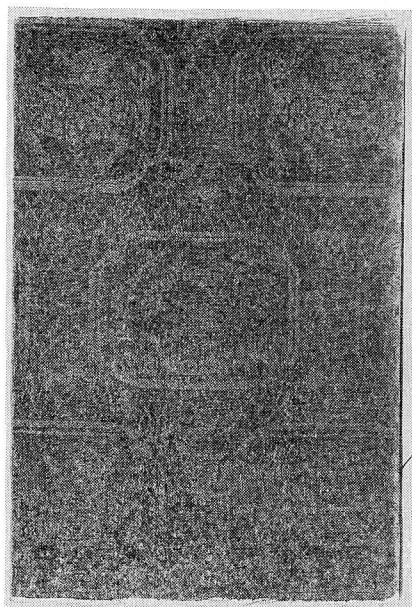
以上のように、野上本と山岸本の相違箇所は、4 項の「郭公」「ほとゝきす」の違い以外には概ね一方の誤写と断ずることが出来、両書の一致度の高さが認められよう。

野上本も写真版で見える限りではあるが前述のように鎌倉中期ごろの写本と思われるので、この野上本と山岸本とは「左京大夫集」の伝本の中では抜群に古い写本と考えられる。<sup>(注3)</sup> 第一、二類とは別系の古本として重視されてよいと思う。



(注)

- 1 福崎春雄「頭輔集の伝本と問題点」(『立教大学日本文学』第36号、昭和51年7月)
- 2 中川芳雄「左京大夫集(野上本)解説と翻刻」(『静岡女子大学国文研究』第4号、昭和46年3月)
- 3 校正中に送られて来た「冷泉家時雨亭叢書」第三期の刊行案内によると、外題と奥書と本文の一部が定家の筆になる左京大夫集が影印されるということである。広告中に示された説明によると、書陵部本(御所本)と同じ奥書を持つというから、この時雨亭文庫本が現存する最古本であって、第三類本であり、かつ、第一・二類本とも接点を持つ本ということになるであらう。



永久四年四月四日鳥羽殿并合

卯花

あさひふあまのこを乃卯花を  
ゆきせるぬれを思ふる哉

郭云

にほつかふ人しつかほくおす  
るをあるこをときなるあまを

品箱

よろけををあつきよつあやめ草  
かりきつるやまふしるるし

2・オ

早苗

あまのうら田のさなつちあまの  
うらけしつのをあまのうらて

恵

わつふひのふかふさ乃あまの

人のけしつをうらてあまの

六条の御家并合

年よりあまのぬれを思ふるこす  
たつてのふりなりさふりなり

月

けりけり月なりやうらすく

そりけり年かすえぬるま

税

かきわてもあまのふんを思ふ

あまのぬれを思ふるこす

後すゆ通のものとて月

郭云とふり

月かじよつねきされんほくふす

あまのぬれを思ふるこす

人のそとよりあまの

3・オ



世々世々子々孫々  
子孫を以て子孫に  
年々

合  
上る所より子守のたのめちれと  
きふ乃ういひに川をわたりん

儀

けさきてわをいあがななりあ  
 けさきてわをいあがななりあ

我しにてつくろひあま山さく  
ろのちて我にてかてじ

[illegible][illegible]

蔭

しうきせつあけゆちにあられた  
金うしろの天じのうきうき

郭云

人々をいれよう

おもきすゝろまうゝにあくわて  
金づねくらまるこやふりなと

女郎花

予のやうな心持を  
つゝ見くせうとやうに

意

うれこもすゑむつゝひや  
くらきのなまぢうのじまれき

↑  
ちのあひうにたはるくえ  
ちのちんとのりふ

金  
いふてねむいれーふたせ  
ふふふふふふふふふふ

あつてうのいふれこま

くろなきゆめうめちる  
いねとしふとちがしちる

うきうきいと行かへん  
いぢぢしやう之月夜のを

おひかれ焚くおひききり  
をもちわるいさききりゆを

前山王侯松篁集（一）  
てよき（う）こきひく

[illegible]











この後判者の前々もつて  
 貴後乃得て又弁会すし  
 此れはしり判りてきまとき  
 此れはしり判りてきまとき  
 まろうれきまじつねのまろうれ  
 おひききんこもまおひきす  
 これいんのもうきといひあ  
 れきまじつねのまろうれ  
 りせきまじつねのまろうれ  
 きまじつねのまろうれ  
 播磨と家成朝臣弁会せし  
 月  
 いひのこもまじつねのまろうれ  
 りせきまじつねのまろうれ  
 まろうれきまじつねのまろうれ  
 あつちや乃きまじつねのまろうれ  
 いひのこもまじつねのまろうれ

14・オ

琳買りてとらきけりる  
 こは秋花よりよききけり  
 きのきけりるきけりる  
 ききけりるきけりる  
 いりきけりるきけりる  
 つすきけりるきけりる  
 わきけりるきけりる  
 庭室をれてやきけりる  
 のきけりるきけりる  
 あきけりるきけりる  
 うきけりるきけりる  
 いきけりるきけりる  
 い月十め辰中交御方より  
 つきけりるきけりる  
 人きけりるきけりる  
 まきけりるきけりる  
 りきけりるきけりる  
 播磨と家成朝臣弁会せし  
 いきけりるきけりる

15・オ



其の事  
 人々  
 其の事

兩後車條之上題

うんづろとつじもしるしよの両  
ふきつろのうづろちきれる

龍泊丹の用法より

て大いに、今、千、  
る、一、す、を、て

三三三

すゝのきのきつゝるたにすとも  
いさといつてさるるん

花のまゝに人々をうけて

きてのちいさなりぬえ  
偏旁たこりふをよむ

わが家の毛糸と、うさぎの毛糸と、  
うさぎの月ひかりと、うさぎの毛糸と

送

[illegible]

くろのりなまともな

漢儒

よの中はけろとき方たりて  
あふれをゆふにいらせる

郭公

ほろもつすきりやにまゝに地ゆへ  
おまのせうやうにさうくるにて

セリ

けきのふねをりをしてて、  
 ちやむ：所ののまろとわたり

宣

わさくはるのふにきくのりな  
うひのすはうもよわり

歲暮

わりのなすをにけるうる

晨月

みじろぶさね。あまのうしろつ  
きんしのうしろつ。のこる。

百部

るなりてこゝもあゝ けりせよ  
 ゆう きせをいわれうすき  
 祝  
 きまらふよりふのふなりぬわ  
 つくひのりをひらうのむし  
 長承元年十二月廿三日内裏  
 和弁殿十五  
 春雨  
 うのふとあふくを春雨  
 け一乃えうやいれうひし  
 雨馬  
 りきりんけすきぬやううん  
 よる更すうにうるうね  
 梅  
 うぼくすいせれしうしむのりな  
 しいきふりゆきれあけなり  
 まね  
 ふとよやあゝうねんをいなりを  
 むとねさめの人こりや  
 照射

20・オ

あひさゆきまふ山こりすい  
 けうきうきてうるにやあゝ  
 曜夜  
 あひさゆきをれうにりす  
 けうきをきあすこるのりな  
 霧  
 よしのふもきやきせれたらぬん  
 いせ乃山のまうやういふ  
 虫  
 うきさうすううのききんす  
 こころいふのうらうら  
 萩  
 むしとねうられのやのききんす  
 うれうらうのけききんす  
 霜  
 かろのけのうきひをめつるうききんす  
 うけいふにききんす  
 千鳥  
 あひさゆきをれうにりす  
 りいなるとちりうらうら

21・オ



薩摩  
 天つらつとよりのめいーいさう(と)も  
 るをこのしにふるるりきり  
 初立  
 じりとりいさうとていさういし  
 いれい山にきふりつりか  
 思立  
 あいさやらしめれすうはけらるる  
 ころころやうむらりりなれ  
 會不違立  
 ひととといのうりやうひりなく  
 ころころめぬうきーまのつこ  
 近東院御時大寺會和子  
 悠紀方 近江國  
 風俗和子十号  
 後三行在京太東面出舟倉まゐる藤  
 稻春子  
 人ころやすのふかりときくもつ  
 けきとけにせすいふいぬる  
 神樂子三上山

22・オ

りやうききのうのさきつを  
 うをうけりこめてううとれ  
 辰日 糸音殿 高柳念山  
 られくるそりこく山ねばうひの  
 るにみゆきつこつりな  
 同日 柴破 玉花井  
 まりるきすおつけの升のえき  
 うちすこきよきまのひにき  
 同日 柴急 長等山  
 きふふいさうの山乃いぬねうり  
 らいやりうひりなとて  
 同日 退お音聲 安良卿  
 やすこーふわりおほきれふよこえ  
 ころやすのきここめれ  
 己日 泰音聲 佐野船橋  
 こそこのきこをせぬきふよ  
 ころころいわるころうなり  
 同永破 明日卿  
 いけしとあうひのこけしうり  
 ころきこいふつきまれりな

23・オ

同日本破 大富山  
 ころのりらほととあらよりなる  
 きみくきみをさつりーとら  
 同日退り青聲 秋富村  
 きみくきみのりららにねら  
 うつてゆりあきことこのし  
 沖岸風六祐和年十八  
 甲祐五三月  
 長冬求ね多生  
 きみくきみのりららにねら  
 ころのりらほととあらよりなる  
 見え玉有橋若菜人  
 りこせのりらにねらにねら  
 梅原梅花威人散  
 つれをわきてしにねらにねら  
 乙祐三四月  
 青柳村樹多  
 きみくきみのりらにねらにねら

24・オ

りいきてとゆりあをきこのし  
 白雲山梅花威人行客見  
 やつてさるーと山ろにりな  
 かねるりやーるるるる  
 山次行歌冬雨製行人見  
 いろねるららるるるるる  
 りやそにきくふらふのさき  
 丙祐五六月  
 長澤池有橋若菜人  
 りとにきいすひくうなやめく  
 ねるるるるのりらにねら  
 千歳里殖田所基多  
 三つせいのりらにねらにねら  
 りとにきいすひくうなやめく  
 常夏里每人家明屋夏用  
 やつてさるーと山ろにりな  
 りとにきいすひくうなやめく  
 丁祐七六月  
 石籠水如糸  
 じつとらるるるるるるる

25・オ

介川のしといくよりぬん  
 千草原迄草花開敷  
 いろくれくさのりやとわいせに  
 いらりりのうきなるあしん  
 玉井宿月  
 くりなくすじののたきく  
 くりをうづよの月を  
 代帖 九月  
 板倉山と田多積橋人見ん  
 いしくの山の川めるいねをみ  
 代さるるより外をさるる  
 金波用蓮調物人馬を  
 介つてまれのよと代るいほはれ  
 くらえきりわすうさりのせき  
 鏡山紅葉盛客見え  
 男よえつくあうさるかえん  
 天みらのつらやうさるる  
 鷹虎山有鷹狩  
 介りするそののをやりいさきや  
 き介りさのいさきさるる

26・オ

登田社金神一軒  
 すつてをさるるすのりなりや  
 あらうらうのうさるるせぬ  
 高文里白雪を原  
 あささきうさるるのさ  
 康治元年十月三日  
 橋政殿金利海次女に  
 うせ作て成成佛通のうを  
 改海二子もあさるる  
 あらうさるる  
 いうてわれんのきをあらうて  
 いうてさるるひをさるる  
 人を来てうさるる海邊  
 月を  
 すとのれにやさるる月のしるるも  
 月のしるるのうさるるあさるる  
 月照菊花とリトを新院  
 のよとせをさるる  
 いくとさるるさるる

27・オ







